



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel: 046-871-1863 Fax: 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net) mail: ryukeiji@kanadean.net

生きて行くということは

先日『徹子の部屋』で、今は上高地で暮らしているという、ホーク歌手・上条恒彦氏が「生きて行くということは」という歌を歌っていた。仕事をしながら聞き流していたので、いい歌だなあと思ったときには終わりに近く、全部を覚えてはいないが、永六輔、中村八大の黄金コンビの作詞作曲だという。“生きて行くということは、誰かに借りを作っていくこと、生きて行くということは、誰かに借りを返していくこと……”という歌詞だった。己の歳と年の瀬を迎え、それを聞きながら、ほんとうにその通りだと思ったことでした。

* * *

先日、坊守（家内）が大阪の姉の顔を見に出かけました。「見舞いに」でもなく「会いに」でもないのは、姉が認知症の状態にあるからです。姉はやはりお寺の坊守でしたが、病弱だった夫を支えながら、空襲で焼失した本堂を再建し、自らも大病を克服し二人の息子を育て、舅と夫を送りました。都会のお寺の坊守らしく、明るくしっかりした人でしたが、認知症が始まったのは割と若く、今は家族に見守られながらの生活です。

認知症というのは不思議な病気です。心の衰えなのか、身体の衰えなのかははっきりしません。

しかし、確実に進む超高齢化の中でその八割に現れるといわれていますから、言うなれば老いていくということに必要なものなのかも知れないとも思えます。

姉を見ていますと、一方で夫や両親、兄弟の死も忘れながら、ピアノや長年続けてきた生け花を忘れずにいたりします。子どもや孫を正しく認識できないのに、いとこや友達の名前は覚えています。70を越えてパソコンを身につけ、お寺の帳簿も処理出来ていたのに、今や彼女の住む世界にはパソコンもリモコンもありません。時代はいつに戻っているのでしょうか。瞬間瞬間の会話はとても惚けているとは思えないくらい上手ですがすぐに忘れてしまい、しくじったことも忘れてくれるのはかえって幸いですが、しっかりと長年生きてきた人の尊厳を守りながら介護する子供たちの狼狽や苦労は大きいものです。子や孫の手を煩わせながら老いを生きる姉を見てると身につまされます。

* * *

老人が、自分で生きていけないという意味では赤ちゃんと同じですが、老人と赤ちゃんに違いがあるとすれば、赤ちゃんが成長という方向に向かっているのに対し、老人は衰えていくという方向に向かっているということかもしれません。しかし、人間はみな、生まれ出た瞬間から徐々に死に近づい

て歩いていくということでは同じいのちなのです。「生きる仕事」は「死ぬ仕事」、実質的には「老いる仕事」と言ってもいいでしょう。「老いる仕事」は「生きる仕事」と受けとめたなら、それは避けられない、誰にも代わってもらえない、いのちを全うするための大切な仕事であると思えるようになるのではないのでしょうか。

* * *

毎年、一年間に全国で亡くなられたご門徒の追悼法要が営まれます。この秋の法要でご門主様はどのように語られています。

“一般には、誕生はおめでたいことであり、命の終わりである死は厭うべきこと、悲しいことですが、人生がおめでたいことで始まり、つらいことで終わるだけでは、むなしいことになるのではないのでしょうか。そこで、誕生は仏法に遇うための始まりであり、人生は仏法を聞くためにある。命の終わりは成仏、仏に成ることである。と受け取り直すと、意味が変わってきます。”と。

確かなものが何一つない世の中であって、益々高齢化が進むということだけは確かなことです。そんな世を先きゆく私たちは、人生のさまざまな出来事に際して、お念仏のみ教えをよりどころとして支え合い、おかげさまを感謝して共々に往生浄土の道を歩んでまいりましょう。 合掌

奏庵法座
年末の集い

日時
12月26日(木)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとぎ

今年もすっかり押し迫りました。この一年、皆さまのお励ましとお参りのおかげをもちまして、無事勤めさせていただきましたこと、ありがたく御礼申し上げます。

しきたりや風習にきちんと従うということがなくなったとはいえ、一年を振り返って反省させられたり、大掃除をしなければ……と思うこの時期です。今は煤の出ない生活になりましたが、心の煤は溜まります。仏さまの前で少しは払えるのではないのでしょうか。

どうぞお参り下さい。



平成26年度(2014)
年 回 表

1 周忌	平成25年
3 回忌	平成24年
7 回忌	平成20年
13 回忌	平成14年
17 回忌	平成10年
23 回忌	平成4年
25 回忌	平成2年
27 回忌	昭和63年
33 回忌	昭和57年
50 回忌	昭和40年

ご法事をお勤めする心がまえは、あくまで「亡き人の命日をご縁として、仏法を聴聞させていただく」というのが基本です。しかし、やむを得ず勤めることが出来ない状況にある時もあるでしょう。その際「命日より遅れてはいけない」などというこだわりは無用です。上の表はご法事お勤めする目安です。

お寺と相談の上、故人を偲ぶ方々が集える日を選んでお勤め下さい。

おかげでよい報恩講でした

前日の嵐が収まって、穏やかな秋晴れの報恩講でした。

毎年欠かさず届けて下さる野菜、お供えの果物やお茶菓子、普段からおとぎの食材やお茶もお気遣いいただき、何よりお参り下さる皆さまとそのすべてのおかげで和やかなよい報恩講を勤めさせていただきました。ハワイからの川路先生の「奏庵にきて、はじめて日本に帰った気がする」のお言葉、熟練したご法話は身に染みしました。ありがたいことでした。

編 集 後 記

権力に関われば、こうまで情けなく不細工になってしまうものだろうか。猪瀬東京都知事がやっと辞意を表明した。あれだけ嘘が下手では贈収賄は覆しようもない。不法な下心あつての金品のやりとりは、決して正しいものとして取り繕うことはできないことを覚悟の上で手を染めるべきだった。辞任の弁の中で、それが出来なかった素人だったと、政治家の悪さを告白しているのが正直というかおかしくもある。■権力を持つ者の感覚が麻痺してくるのは、単なる事実の範囲を超えて発生し繋がっていく諸々の力を、わが力と誤解してしまう魔力なのだろうか。これが普通の感覚でいたなら、自分が築いてきた地位ややりたいこと、人格まで失うに値するほどの金額ではないことくらい解ったはずである。■倒れるのではないかと心配させるほどの玉の汗を流しながら、おどおどと答弁する姿は哀れだった。自分が追求する側だったときは、常に見下した上から目線だっただけに、そのギャップが一層惨めにさせた。こういうタイプの人間のもつ傲慢と卑屈が背中合わせの特性を思うと、そのどちらもが本性なのだろうが、「疑念が払拭出来なかったから」、要するに嘘が付き通せなかったと白状したのは作家だった猪瀬氏のプライドかも知れない。心なしか顔つきもよく見えるのは、正気でない人間の姿がいかにも恥ずかしいかを物語っている。■人生は表舞台と楽屋裏。その舞台を勤めるためには楽屋の役割は大きい。そこは単なる家庭とは違う。ほんとうの自分を見つめる場所であり、素に戻って自分を取り戻すことの出来る所が必要なのである。別の尺度、別の価値観で我が身を見つめ直させてくれる所が人として生きるためには必要なのだ。■念仏者には仏に向うという究極の楽屋がある。化粧を落とし衣装も脱いだ、ほんとうの自分を映つす鏡のある所、恥ずかしい自分の姿に気づかされる場所だ。何かあったとき、この楽屋を必ず思い出そうと思う。そうすれば、自分を完全に見失ってしまうことも、他の人の人格を傷つけることも少しは防げるだろう。その楽屋に戻って、また悔いのない新しい年を踏み出したいものだ。皆さまにもどうかよいお年を！！

Norimaru